



伊達慶邦公から拝領した清太夫正義夫妻の肖像画と仙台藩の儒学者 油井牧山による讃。

滝田家の始祖 清兵衛は藤原正明と号する京都院庁警護の北面武士といわれます。戦乱続きの慶長年間都落ちされて隣村 浜田村の金氏を頼り元和年間（一六五〇）「金山澤」に帰農されました。寛永十九年の検地では六畝十歩となっています。

二代目の清兵衛は、漁業など営んでおられ、宝永六年（一七〇九）暴風で海難事故が多発した中、自家の漁船事故皆無の縁起によって小松島に金華山から弁財天を勧請。また「倉屋」を分家されておられます。

七代 清太夫からは村肝入りをとめられ、そのはたらかきは広く藩内の知るところでしたが、天保十一年（一八四〇）に亡くなられ、八代 清太夫が嘉永五年（一八五三）慶邦公巡視の際 拝謁することになりました。

維新にかかる九代、十代を経て十一代 義一の頃は、ご多分にもれず

滝田正義姓ハ藤原。通称、清太夫。小字ハ丑之助ナリ。七世ノ祖、正明ハ清兵衛。称ス北面ノ士ナリ。慶長中、故有リテ陸奥州ニ至リ、気仙郡浜田村ニ寓。元和中、田宅ヲ末崎邑細浦ニ買ヒ馬遷シ総シ細浦人ト為リ、世ノ邑長ト為リ。父ハ賞松ト称。

正義ノ性ハ温良ニシテ施与ヲ好。長ク勤勉ヲ為スニ及ヒ、怠惰シテ廢業者レバ之ノ励マシ、貧乏ニ存スル能ハズ者レバ之ヲ救ヒ賦税ノ徵発ハ必ク期ニ先シ或ハ弁財代償ヲ為ス。長ク官寮其ノ功勞ヲ知リ聞クヲ以テ、朝召シテ褒賞スレバ笑ハ無。

天保丙申大饑。年明ヲ丁丙、請ヒ金百兩ヲ献テ、資ヲ以テ賑濟シレバ、之ヲ賞シ世帛衣ヲ妻孥ニ至ルヲ許シ。復金二百兩ヲ献テ、之ヲ賞シ世氏稱上下。服ニ刀ヲ佩シ四石八斗ノ田ヲ賜ハル。復、出金若干ヲ以テ郡窮民ヲ助テ賞カシ四柱門ヲ建ツルヲ許シ。天保己亥金五十兩ヲ献レバ、之ヲ再賞シ、米二口ヲ賜。中略。以下家業の振興と継承を記す。

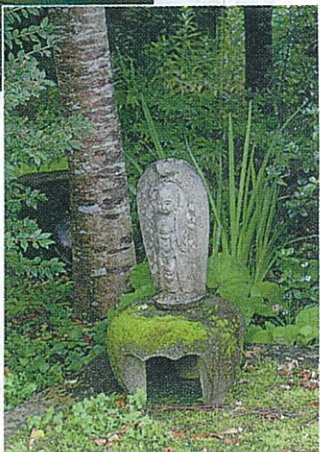
予ハ孝子ノ請ヲ重ク敢テ辭舖スルコトヲス。其ノ大略叙シ、又、贊ヲ作シテ曰ク（以下漢詩に続く。制愛）



先代のご本宅



細浦湾口に祀られた松島神社（弁財天）。十二年に一度、安全祈願の大祭が行われ、ご当家では毎年巳の月に別当として例祭を行っていらっしゃるそうです。



土蔵の周囲は往時の佇まいを残しておりますが、いかにも命を預かる医家らしい緊張した雰囲気包まれていました。右の写真は、さりげなく据えられた地蔵尊。

難渋の時代だったのでしょいか、明治の中頃まで北海道におられ、長子 巖は、岩内郡小沢村番外地で出生されています。しかし、尋常高等小学校は当地で、以降、遠野中学、新潟医専、盛岡病院勤務と一直線に進まれましたが、義一は帰郷後五十歳で他界されたとのこと。十二代 巖は軍医の道を選ばれて、当地に開業されたのは昭和二年でした。いずれ、先代々の遺徳を継承されてか医業の他にも多くの役職に就いてこられ、叙勲の榮譽にも浴されております。

十三代、医院二代目の満は、こうした経緯を深く心に留めておられたのでしょ、先祖を敬い、墓地を整備され、松島神社も修復されて余暇を活かし、平成十三年亡くなられたとのこと。

こうした「温良恂恂」の家風は、現在にもしつかり続いておられると聞かされ、歴世の妙を強く悟らされる思いで伺いました。

